

『日華(台)親善友好慰靈訪問団を代表し、
原台灣人元日本兵軍人軍属三万三千余柱の御靈の御前にて
慎んで祭文を奏上いたします。』

祭 文

『凡生ヲ我國ニ稟クルモノ誰カハ國ニ報ユルノ心ナカルヘキ』(「軍人勅諭」より)
『爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ』(「教育勅語」より)

これは明治十五年の軍人勅諭と同二十三年の教育勅語の一節であります。この中で明治天皇は、阿片戦争の勝利に酔う欧米列強の重圧をはね返し、新生日本を守り、世界に伍して建国していく御意志と、これを担うべく国民のあるべき姿をお示しになられました。

このようなかで明治二十八年、台湾の皆様は日本人になりました。日清戦争に敗れた当時の宗主國・清が「鳥もさえずらない、木々には花も咲かない」といってこの台湾を「化外の地」と切り捨て、わが国・日本に永久に割譲したからであります。

爾来、日台両民族の渾身の努力により、わが国でも有数の豊かで慈愛溢れる地となつた台湾は、欧米諸国の羨望の的となり、支那大陸における滿州國と同様に、國家建設のお手本とされるまでになりました。これは軍人勅諭として収斂されたわが国の武徳の伝統と教育勅語に凝縮された民族共同体の理念を台湾の皆様が真心をもつて受け止め、漲る意氣と使命感をもつて体現されたからに他なりません。

しかるに、昭和十六年十二月八日未明の大東亜戦争勃発により台湾の運命は大きく変わりました。今、御英靈として眠つておられる皆様は、南海の島々や熱帯の密林においては欧米白色人種と、また支那大陸においては蒋介石率いる重慶政権や毛沢東の共産匪賊と生死を賭けて戦つた同胞でした。とりわけ七百倍ともいわれる難関を突破し、血書歎願をしてまで志願してこられた皆様は、日本人以上の日本人として歴史に残る勇猛果敢さを發揮され、敵を圧倒し悩ませたのであります。

國家・国民の総力を挙げた三年と九ヶ月にわたる戦いにより、わが国は国家の尊厳と民族の名譽を死守し、大東亜解放の壮図を成し遂げました。とまれ、わが国が軍事的敗北を余儀なくされたとはい、四百年以上に及ぶ欧米列強の植民地支配に終止符をうち、アジアにおける全ての権益を失わせしめたのは紛れもない世界史的事実であります。

これを偉業といわずして一体何と呼べばいいのでしょうか。わが国の国民として東洋平和のために共に血と汗を流した者同士の兄弟感・一体感はかくして形成されたのであります。台湾の皆様が五十年間の日本統治時代の伝統や文化、はては「大和魂」を高く評価し、これを日本精神として継承している世界に類を見ない親日的な国家・国民である由縁はここに淵源があります。

私達は、この様な台湾の皆様の熱と誠心に応えるためにも積極的に家族交流・兄弟交流を深め、その紐帶を今まで以上に強固なものにしていきます。それは今日の私達日本人に民族としての自覚と誇りを高めてゆく契機にもなるからです。

平成十一年以来、私達は宝覚寺における「原台灣人元日本兵軍人軍属戦没者大慰靈祭」に参列させていただき、三万三千余柱の御靈の安らかならんことをお祈りしてまいりました。今後も、この顯彰事業を風化させることなく、更に充実・拡大し、若い次世代に継承してゆくことが、「日本人として散華された御英靈」にお応えする私達の務めであると考えております。

以上の決意も新たに、わが国の近代史に類稀なる勇気と献身を刻まれた御英靈の御遺徳を偲び、御靈の平安を心より祈念し、慰靈の言葉といたします。

日台の生命の絆 死守せむと
吾 日本の一角に起つ

平成二十一年
民國九十八年
皇紀二千六百六十九年
十一月二十五日

团长 小菅 亥三郎

日華(台)親善友好慰靈訪問団